

国際化は、国際社会の道理尊重が前提では……

お盆の時期は、終戦記念日と重なる。この時期、もう20年程前から約5時間半に近い「東京裁判」の記録映画のビデオを見ることを習慣にしている。

時の為政者がどう考えていたかとか、戦勝国は何を根拠に裁いたかというような歴史上の戦争を知りたいというより、記録に挿入されている、抑圧や殺害等の悲惨な名もなき人々の映像を目にすることで、戦争行為というものが、人々にとってどういった行為であったのかを、自分の中での再確認作業の一つと思っている。

最近マスコミ上で、靖国問題と絡め「東京裁判は勝者の勝手な裁判だった」と主張し、講和条約さえも見直すべきという識者の論調を見聞きすることがある。

こうした論調を耳にすると、自称識者は、歴史から何を学んでいるのだろうかと思ってしまう。

どんなに理由や意味づけをしようが、また「正義の戦争」とか「聖戦」と名をつけようが、一般人が理不尽な被害を受けない戦争などあり得ない。

なぜなら「戦争は、国家という名による暴力行為そのもの！」と思うから。

また、講和条約では、日本が東京裁判を受託する旨が明記されている。日本は、この条約により国際的に独立が認知された。つまり、この条約が今の日本の国際社会に存在する国際社会の道理（ルール）の基だと思う。

それを東京裁判や講和条約は戦勝国の勝手な押しつけだったから受け入れ難いという私的激情論が、果たして今の国際社会に通じるのだろうか。

資源の乏しい日本が、国際社会の道理を無視して生きて行けるはずはない。

「これからの日本は国際社会の中で生きていくために国際感覚を！」ともよく耳にするが、それをいうなら国際社会の道理を前提として話し合わないと混乱し、国際社会から疎外されるだけでないだろうか。

養老猛司が「教養とは、人の心が解る心」と云うように、人間関係だけでなく、国家関係でも同じだと思う。自己主張だけでは人間関係が深まらないように、国家間でも信頼は深まらないと思う。

世界の国々は「戦争のない世界に！」という人類史上かつてない共通の難題に苦悩しながらも連携して挑まなくてはならない。そのことへの国際感覚からの冷静な、建設的な、新たな見識、論調を識者やマスコミに期待したい。

特にマスコミには、私的激情に迎合せず、また、時の権力に対しては「ペンは剣より強し！」を期待して止まない！

(2005年8月18日 記)